

菩薩道から見たクローン人間の意味

北 浦 賢 一

〔抄 録〕

これまでクローン人間という存在は、映画やアニメーションなどの空想世界のイメージでしかあり得なかった。しかし、クローン羊「ドリー」の誕生は同じ哺乳類に属している人間にも生殖技術としてのクローン技術を応用することが可能になったことを示している。本論ではクローン技術を人間に応用する時に生じる問題を、従来の文化的社会的定義と親子間で同じ遺伝子を求めようとする動きに照らしつつ、二人の仏教者の発言をもとに考察した。そして、クローン人間も不妊治療の一つであり、それは親子関係の多様化を意味している。日常生活の規範として仏教を採用している人々は、生まれ方の違いによって態度を変えずに接することが必要であり、それは大乘菩薩道を修めることにつながる。

キーワード：クローン人間、生殖技術、遺伝子、親子関係

はじめに

近年、テレビ・新聞・インターネットなどのマス・メディアを通じて生殖技術（バイオテクノロジー）に関する話題がよく報道されているが、そのような技術が高度に発達することによって、多くの文化的社会的問題を生み出している事例が増えているように思われる⁽¹⁾。それは、人間の誕生と成長という根源的な部分に対して何らかの人為的な操作を加えることであるが、このような行為によってもたらされる違和感とは、私たちが常日頃からイメージしているであろう、従来から定義されている人間らしさ⁽²⁾に対して再考を求めているからに他ならない。このような技術に対して、私たちは一体どのような考え方で接すれば良いのだろうか。果たして、全ての人間がそれなりに納得できる最大公約数的な考え方は存在し得るのであるだろうか。学問分野においてそのような問題を考えようとするれば、まず第一に挙げられるのは生命倫理（バイオエシックス）であろう。それは、これからも間断なく発達を続けようとする生殖技術によって引き起こされるかもしれない数々の問題に対して、具体的に対処するために必要な考え方の手

がかりやガイドライン、そしてケーススタディを組み立てる理論的支柱となる学問である。ちなみに生命倫理とは1970年代から科学技術の発達にもなって現れてきた新しい学問であり、主に英米を中心にして議論が展開されているが、それは哲学・社会学・人類学・歴史学・法学・生物学などの専門家が集まることで成立している、学際的かつ新しい学問分野である⁽³⁾。

いうまでもなく、生殖技術の発達には私たちがこれまでに抱いていた常識、すなわち、人間らしさという概念をいとも簡単に覆す能力が含まれている。このような問題に対して、仏教の考え方をを用いて何らかの回答を見せている例は残念ながらほとんど見受けられないように思われる⁽⁴⁾。仏教は生・老・病・死という人間生活における重要な局面で生じる数々の典型的な苦しみを、四苦・八苦という具体的な分類をもってパターン化することで説明しているが⁽⁵⁾、このような考え方は現在でも有効であると考えられよう。本論では、まず最初にクローン人間⁽⁶⁾の誕生によって生じる問題を概観しておく。次いで、人間らしさというイメージを考えるために、二人の仏教者の発言を参考にしながら議論を行ったうえで、最後に筆者なりの回答を示しておきたい。

1. 遺伝子が同じということ

一昔前までは空想の産物でしかあり得なかったクローン人間。それは、映画やアニメーションの世界だけに見られるフィクションでありイメージであった⁽⁷⁾。しかし、1990年代に入るとIT(情報技術)の急激な発達と歩調を合わせるかのように、生殖技術も目覚ましい進歩を遂げることになる。このような状況において、不妊治療⁽⁸⁾の一つとしてクローン技術を用いたクローン人間に注目が集まるのは当然の成り行きであるが⁽⁹⁾、その理由を考える手がかりとして、まずクローン人間を欲しがる具体的な理由を以下に列挙する。

- ①同性カップルで、自分たちの遺伝子を受け継いでいる子供が欲しいから。
- ②異性カップルで、夫の精子あるいは妻の卵子の遺伝子のみを受け継いでいる子供が欲しいから。
- ③臓器移植が有効とされる患者に対して、人工的に胚性幹細胞(ES細胞)に手を加えることで移植に必要な臓器を作り出せるから。
- ④文化的社会的に優れた功績を残した人物(偉人)の遺伝子を受け継いでいるコピー人間を作り出すことで、社会に貢献させたいから。
- ⑤自分だけの遺伝子を受け継いでいる子供が欲しいから。
- ⑥自分だけの遺伝子を受け継いでいるコピー人間(人体)を作り出すことで、より確実に臓器移植を成功させたいから。
- ⑦宗教的価値が高く付与されているから。

ここから読み取れることは、親子関係をイメージする要素として遺伝子に注目していること (①、②、⑤) である。その理由として、男性カップルの場合は卵子を、女性カップルの場合は精子を、それぞれ第三者から提供を受ける必要があるが、クローン技術を用いればカップル以外の他人の遺伝子が入ることはない (①)。また、何らかの理由で精子か卵子が使えない状態にあるか、カップルに重い遺伝病がある場合など、どうしても配偶者間人工受精 (AIH) を避けたい時に、カップルの男女どちらかの遺伝子を使う (②)。そして、単に自分と同じ遺伝子を持っている子供が欲しい (⑤) などが挙げられるが、どの理由を見ても親と同じ遺伝子を受け継いでいる子供を授かることが重視されている。これは、生物学的な証明をもって親子という実感を強く抱くという意識の現れであろう。他にも臓器移植に必要な臓器を手に入れるため (③) やその確実さをより高めるため (⑥) といった理由があるが、どちらも移植に用いる臓器を確実に確保するためには、移植する患者と同じ遺伝子を受け継いでいる臓器が手に入ればベストであるという考えが見える。そして、ある特定の人間と全く同じ人間を生み出すためには、その人間と同じ遺伝子を持っているべきである (④) といったものや、同じ遺伝子を受け継ぐことに宗教的な価値を見出す (⑦) というものもある。このように、遺伝子の同一性には親子関係や臓器移植の有効性、さらには宗教的な問題についてもそれぞれが主張している正当性を補強するという効果が含まれているように見える。それでは、遺伝子にこだわる理由にはどのようなものがあるのだろうか。美馬達哉氏は「近代社会は、生物学が至上の価値とされ、オヤコ関係は遺伝子の連続性とイコールであるとみなされているのが特徴である。(中略) 女性の身体、とくに出産・妊娠をめぐる領域は (中略) 医師の管理のもとに入ったのである。医療化が、遺伝的オヤコ関係の絶対視と歩調を合わせて進むとき、「遺伝的に健康で賢い子供」を生み出すための生殖技術応用は必然ですらある。(中略) 生殖技術の問題は、安全性という技術的レベルにあるのではなく、家族制度・医療化・優生思想などの社会的レベルの問題を問いかけている」と指摘している⁽¹⁰⁾。私たちが生活している現代社会において、遺伝子という用語に特別な意味を持たせたり、強い期待を抱く理由がここにある。それはまた、人間を含む全ての動植物の性質を分析することが可能な共通の生物学的「物差し」であるとも考えられている。

もう一つ、どの理由にも見受けられることはクローン技術によって子供 (臓器、偉人) を欲する権利であるが、その一方で、クローン技術によって誕生することを、その技術で誕生する子供 (臓器、偉人) によって拒否する権利が全く存在しないということである。いいかえれば、欲しがらる人物の考え方で全てが決定してしまうのであり、それは生み出される子供 (臓器、偉人) には何ら決定権がないということを意味している。このように、クローン人間に関する問題は生殖技術をめぐる欲望と倫理の問題、すなわち当事者の自己決定権にまかせることであり、もう一つは人の尊厳に反するという問題である。異性カップルの有性生殖によって無作為に遺伝子がかけあわされて生まれてくる過程に、一人ひとりの人間の独自性と尊厳があるとすれば、無性生殖であるクローン人間は、その存在自体が社会や家族関係に混乱を生じさせる可能性があるだろう。

2. 人間らしい生命の誕生とは

それでは、生殖技術の一つであるクローン人間が有している問題を、二人の仏教者の見解から考えてみることにする。川田洋一氏は「人間生命誕生の主役は、中有身そのものであり、中有身が顕在化し、生有をむかえるための助縁として遺伝情報をになった精子と卵子の動きがあると考えられる」として、「クローン人間（コピー人間）は一定の目的のために製造されるものであり、本来的に人間の尊厳に反するものである。（中略）仏教では“自体顕照”と説く如く、多様性の中にこそ、個性が輝き、仏性の発現がある」とする⁽¹¹⁾。ちなみに中有身とは中有のことであり、それは「前世での死の瞬間（死有）から次の生存を得る（生有）までの間の生存、もしくはそのときの身心をいう。その期間については、7日、49日（七七日）、無限定などいくつもの説がある。（中略）この期間の身体は次に生を享ける本有の形であり、人の場合は五蘊をそなえた5、6歳くらいの子供の姿であるが、微小なため肉眼では見えないとされる。また中有は乾闥婆（gandharva）ともいわれ、香りのみを食物とするので〈食香〉とも訳される。しかし、仏教の学派では中有を認めないものも多い」とあり⁽¹²⁾、川田氏は「仏教では、精子と卵子とが合一した妊娠の瞬間を生有といい、死の一刹那を死有とします。生有より死有までの間を本有とし、死有より生有まで中有と名づけます。つまり、中有とは死後から転生までの生命をさします。中有身ともいいます」としている⁽¹³⁾。生物学的に言えば、男女の性交によって精子と卵子が受精することで生命が誕生（妊娠）するが、中有身の存在を認めている川田氏の見解を踏まえると、妊娠とは前世からの業を受け継いでいる中有身が具体的に現れることであると考えられる。川田氏はこのような考え方を仏法的産科学⁽¹⁴⁾、仏教産科学⁽¹⁵⁾と名づけて、生命の誕生には精子と卵子と中有身が揃うことではじめて成立するとしている。

ちなみに、川田氏は中有身を識と同じ意味で扱っている。識とは「（区別して）知るものを〈識〉という。この知るとは、対象を得ることであり、その作用を伝統的には〈了別（りょうべつ）〉という。説一切有部では識について、眼・耳・鼻・舌・身・意の六識のみであり、心や意と識は同義異名と見た。唯識派では、心は阿頼耶識（八識）、意は末那識（七識）、識は六識を表すと考える」ということであり⁽¹⁶⁾、川田氏は「識は、仏法では、認識作用での識よりも広い意味を持ち、意、心と同じように使用することが多いようです。唯識派では（中略）八識としての阿頼耶識を生命の根本流である」として、「五識、六識が意識にのぼる領域であり、七識（末那識）が無意識層にあります。自己の生命をかけた慈悲の行為が、個の生命全域を激動させ」る基盤が八識（阿頼耶識）であると指摘している⁽¹⁷⁾。

次いで、中野東禪氏は「仏教では生命も含めてすべては縁起・仮和合であると見る。したがって、生命の個体は自然環境と縁起的相関性によってあるのだから、個体は環境に寄りかかりつつ、その縁起関係をとりまとめている状態が生命の自立ということになる」として、「仏教では「仏のおん命」といい、人間的な欲望の命ではないと見ると同時に、「仏の命を実現し、悟

り・信ずる」命とも見る」ことは、「仏から預かった命を人間が努力してよきものにするには許されるが、人間生命の発生という仏の世界に踏み込んで人間の支配下に置くことは、恐るべき輪廻を繰り返すことにつながる」としている⁽¹⁸⁾。縁起とは「仏教の中心思想で、一切のもの(精神的な働きも含む)は種々の因(原因・直接原因)や縁(条件・間接原因)によって生じるという考え」であり⁽¹⁹⁾、仮和合とは「この迷いの世界のあらゆる存在は、因縁によって和合して成立している仮の存在であるが、その状態を<仮和合>という」ことである⁽²⁰⁾。生命の誕生そのものは精子と卵子の受精によって成立するが、それが有している性質を決定するのは受精時における夫婦の健康状態や周囲の環境であり、人為的な操作を加えることは決してあってはならないとしたうえで、そのような条件を大切に守り続けることが、中野氏のいう「仏のおん命」であると考えられる。

川田氏と中野氏の両者の議論に共通していえることは、生命の誕生に目的意識を持つことを戒めていることである。それは異性カップルの有性生殖によって誕生する生命を人間らしさの象徴として見るという、従来の文化的社会的定義に著しく抵触するからに他ならない。前述の美馬氏の指摘⁽²¹⁾にもあるように、近代社会は生物学を重視する特徴があり、それが親子関係を決定するうえで遺伝子にこだわる理由になるのであるが、そのような振る舞いは因らずも仏教における執着に該当する。この場合の意味としては、何がしかの人物や組織にとって有益であると考えられている、ある特定の条件を満たしている生命の誕生にこだわることである。

確かに、クローン人間という言葉が醸し出す違和感というものは、私たちが求める人間らしさから大きく外れているように思われる。しかし、実際に自分と同じ遺伝子を受け継いだクローン人間が誕生したとしても、それは単に遺伝子が同じというだけであり、現実の世界における生き方はそれぞれの時代・地域・社会・文化によって大きく異なるのである。遺伝子は人間の存在に「必要な条件」ではあっても「十分な条件」ではない。仏教では無分別、すなわち、あらゆる物事を分け隔てなく把握することを説いているように、遺伝子ばかりに注目して親子関係を求めることは、まさに執着であるといえよう。ところで、クローン人間の安全性に由来する言説として「五体満足で頭脳明晰かつハンサムな子供が欲しい」というものが考えられる。このような表現は「病気や障害のある子供は欲しくない」という、病気に罹っている人や障害を有している人を排除するという差別的視点がどうしても入ってしまうのである。このような問題が生じる理由として、安全性を決めるために正常と異常に分けるという二つに一つの見かたを持ち込んでいるからであるが、それは近代医学上の操作的概念に他ならない。正常-異常の二分法的見かたが差別的視点を生み出す原因であるとすれば、クローン人間の誕生そのものを避けるか、たとえどのような状態であっても誕生したクローン人間をありのままに受け入れるという方法が考えられよう⁽²²⁾。

無分別という考え方は、分け隔てることを拒否して全ての対立を超越することである。このような立場から生殖技術を見ることは、私たちがイメージしている人間らしさを再考すること

になり、ひいては近代社会の親子関係を根本的に見直すことになる。生殖技術の高度な発達は子供の誕生パターンを増やすことであり、それは親という存在の多様化も認めるということである⁽²³⁾。異性カップルによる有性生殖、配偶者間人工受精（AIH）、非配偶者間人工受精（AID）、代理妊娠母（借り腹）、第三者による精子・卵子提供、同性カップルや独身者による単性生殖（いわゆるクローン人間）などに対する議論の是非は、人間らしさと遺伝子の同一性に対する執着の程度によって決定されるものと思われる。

おわりに

仏教では執着を否定しているが、それはある事物に対して強くこだわったりとらわれたりすることが分別になるからである。分別や執着から離れることは、あらゆる存在や可能性を認めることであるとともに、生命の誕生に関して多種多様な考え方を容認することになる。たとえどのような経緯があったとしても生まれてくる子供たちには何の罪も存在しない。そもそも、人間らしさと遺伝子が同じであることを追求することで生じる種々の問題を少しずつ克服していく行為そのものに、仏教における修行が成立するように思われる。先にも述べたように、高度に発達した生殖技術を人間に適用することは、程度の差はあっても従来の文化的社会的問題に抵触することに他ならない。このような問題を乗り越えようとするのであれば、例えば異性生殖と単性生殖の生まれ方の違いを挙げて議論するのではなく、両者はともに同じ人間であるという考え方に立脚しなければならない。いいかえれば、生まれ方の違いによって態度を変えることなく、思いやりをもって等しく接することが大乘菩薩道を修めることにつながるのである。

最後に、生殖技術の進歩そのものを全否定するつもりはないが、私たちの日常生活に由来する感覚から大きく乖離している技術の運用については、何がしかの考えを発表することによって注意を喚起する必要があるように思われる。それは、新しい技術や思想を用いる時に「果たしてこれで良いのだろうか？」という躊躇いを生じさせることで、その行為に対して批判的な態度を取る機会を少しでも増やすことが可能になるということも含まれる。このように、前例のない事例が多くを占めている生殖技術、とりわけクローン人間という新しい概念について考える場合にも常に慎重な姿勢を取り続けることが求められよう。

〔注〕

- (1) 2003年9月22日にインターネットのYahoo!検索で「クローン人間」と入力して検索すると、約13400件のページが見つかった。さらに絞り込み検索で「クローン人間 問題」と入力して検索すると、約7430件のページが見つかった。

- (2) 単純に考えるのであれば、お互いに好意を抱いている男女が共同で生活を営み、結婚を経て通常の性行為によって女性が妊娠して出産し、夫婦の協力によって子どもを育てることであろう。
- (3) ある特定の問題の提起から解決に至るまでの方策が多様性を有している学問の一つとして、生命倫理が挙げられよう。ここでいう多様性とは、一人ひとりの人間は異なる存在であるということである。それは、各々の人間が共有している問題そのものは同じであっても、それをどのようなものとして感じるのかは各々の人間によって異なるということである。生殖技術の発達によってもたらされる効果（例えば、不妊治療はどうしても子どもが欲しいと思う異性・同性カップルにとっては福音であろう）をメリットとするか、それとも、人間らしさというイメージを崩す要因であるからデメリットとするか。その捉えかたは人それぞれである。
- (4) 具体的には以下の二書が挙げられよう。

川田洋一 1996：『脳死問題と仏教思想』レグルス文庫 第三文明社
中野東禪 1998：『中絶・尊厳死・脳死・環境』雄山閣出版
- (5) 『岩波 仏教辞典』を参照。
- (6) ある人間と同じ遺伝子を受け継いでいる人間のこと。もともと、クローンという用語は生物学において「ある特定の細胞を人工的に複製（コピー）して培養する」という意味で使われていた。しかし、近年では「複製したい生物から細胞を取り出して、その中に含まれている遺伝子を引き継ぐ形で人工的に生物を複製する」という意味で使われることが多い。ちなみに、体細胞核移植によるクローン（cloning）とは、未受精卵から核（遺伝子）を抜き去って人体の細胞に含まれる核を注入することであり、人間を含む全ての生物を構成している組織や臓器に変化する能力を持つ胚性幹細胞（ES細胞）を作り出すことである。
- (7) アニメーション作品では、『超時空要塞マクロス』などが挙げられよう。この作品では男性クローン人間のみで構成されているゼントラーディ軍と、女性クローン人間のみで構成されているメルトランディ軍の宇宙空間における攻防が描かれている。ちなみに、現在の生殖技術で最も誕生の可能性が高いと思われるのは女性クローン人間である。なぜなら、女性は自分自身の卵巣に未受精卵を保有しているので、完全に自分の遺伝子を受け継いでいる組織だけでクローン人間を生み出すことが可能だからである。男性クローン人間の場合には、他の女性から未受精卵を提供してもらう必要があるが、それは男性の遺伝子とは異なるそれを受け継いでいる卵子を用いることになるので、完全に同じ遺伝子によるクローン人間は現状では不可能である。ただし、男性の遺伝子を組み込んだES細胞から卵子を作り出すことが可能になれば、男性クローン人間もアニメーションのイメージから現実の存在になり得るであろう。
- (8) 日常生活において適切な性交を行っても妊娠することが不可能な状態、いわゆる不妊症の異性カップルに対して、配偶者間人工受精（AIH）や非配偶者間人工受精（AID）などの治療を行うこと。本論では異性カップルと同性カップルの両方に適用することが可能な治療として、クローン人間を例に挙げた。
- (9) 1996年7月に英国で誕生したクローン羊「ドリー」の事例は、ヒトも属している哺乳類動物でもクローン技術の有効性が確認されたことで、当時の世論は一気にクローン人間の誕生を予感するものとなった。なお、クローン羊「ドリー」の誕生については次の通りである。6歳のメスの羊の乳腺

細胞から核を取り出して別の羊の未受精卵に移植することでクローン胚を作り、これを別の羊の子宮に移してドリーは誕生した(別の羊:代理妊娠母、借り腹)。これまで体細胞によるクローンはカエルのみ可能であったが、ドリーの場合は哺乳類による初の成功であり、それはクローン人間の可能性を惹起するのに十分なものがあつた。そして1998年4月、ドリーは自然交配で「ボニー」など合計4頭を出産し、クローン羊に生殖能力もあることを証明した。しかし、ドリーは細胞の老化と関係が深いとされている染色体(テロメア)が通常自然交配で産まれた羊よりも2割くらい短かつた。これが老化の進行を早くさせた原因であると考えられているが、現状において決定的な結論は出されていない。(上村芳郎 2003:『クローン人間の倫理』みすず書房、62-64頁、87-89頁)

- (10) 美馬達哉「生殖技術」(医療人類学研究会編 1992:『文化現象としての医療』メディカ出版、296-299頁)
- (11) 川田洋一 1996:『脳死問題と仏教思想』レグルス文庫 第三文明社、88頁、113頁
- (12) 注(5)に同じ。
- (13) 川田洋一 1975:『仏法と医学』レグルス文庫 第三文明社、100頁
- (14) 注(13)98-106頁。
- (15) 注(11)に同じ。
- (16) 注(5)に同じ。
- (17) 注(13)80-82頁。
- (18) 中野東禪 1998:『中絶・尊厳死・脳死・環境』雄山閣出版、67-69頁
- (19) 注(5)に同じ。
- (20) 注(5)に同じ。
- (21) 注(10)に同じ。
- (22) 村岡潔「不妊治療」(佐藤純一 黒田浩一郎編 1998:『医療神話の社会学』世界思想社、170-171頁)を参照。
- (23) 不妊治療の技術的進歩は人間らしさの是非を問うことなく、実に多種多様な親子関係を生み出すことになる。(別冊宝島編集部編 1993:『赤ちゃんがほしい!』別冊宝島88号 宝島社、139頁)

〔付記〕

本論は2003年4月18日に佛教大学四条センターで開催された佛教大学ビハーラ研究会において、『クローン人間と仏教思想—生命倫理学に関する一考察—』として発表したものを大幅に改稿したものである。

(きたうら けんいち 文学研究科仏教文化専攻修士課程)

(指導:村岡 潔 教授)

2003年10月15日受理